
人を好きになってはいけない

瞬歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人を好きになっではいけない

【Nコード】

N7048J

【作者名】

瞬歌

【あらすじ】

幼いころ、実験を施された零という名の少年。彼はその実験から抜け出して、ある一人の少女に出会う。彼女は「一緒に遊ばない？」と声をかけられる。それは彼が初めて知った、初めての箱の外の世界の人間だった。そこから彼は人というものを知り始めることになる。

—俺は誰も好きになりやしない。

過去（前書き）

少しグロテスクかもしれませんが。

過去

目を開ければ目の前には数分前には生きていた子供の死体。体にはやけどの跡が無数にある。

このこは実験台として使われた子だ。

新しいものを作るには犠牲が必要になるんだ。

それが俺らだ。

薄暗い部屋に夥しいほどの実験器具。

その器具で僕らは人から徐々にとうざけられる。

人じゃなくなっていく。

それがどんなに怖いことか。

「オイ。そのガキ。ちよつと来い。」

誰も口をあけやしない。

「こいつつてんだろお!!!」

「レイカ!!!!!!」

一人の女の子の腕がつかまれる。

「イヤア!!!」

どんなに叫けんでも、

どんなに泣いたとしても、

連れて行かれるんだ。

俺らは連れ行かれた子を助けることはできない。

ただ見ているだけ。

それしかできないんだ。

レイカは大人に無理やり腕を引っ張られて、されに薄暗い部屋へと連れて行かれた。

その中でやることなんてみんな分かっている。

―実験という名の拷問。

ここの子供達は5〜8歳ぐらいの子供達が中心だ。

10歳の子供以上は奴隷市場で売り飛ばされる。

でも、一つだけ言える。

売り飛ばされればこよりひどいことも待ち受けている、と。そして、ここの子供はみな番号が体に刻みこまれる。

俺の数字は0だ。

この世で一番嫌いな数字だ。

その数字は俺の左腕に刻まれている。

「この大人はその数字で俺らの区別をつけている。」

カツン。カツン。カツン。
カツン。カツン。カツン。

足音が響き渡るこの部屋。

悪魔の足跡が俺に近づいた。

「0。来るんだ。」

腕をつかまれて一番嚴重とも言つていいほどの部屋に連れて行かれる。

どんな抵抗をしても次に起こることは変わらない。

「いやだあ！！はなせえ！！！！」

嚴重な拘束器具の上に寝こばされる。

そしてどうもこうもあがけない状態にされ、実験は開始される。

大人は俺を見下しながら検査結果を取る。

太いチューブが何本も俺の体のいたる部分に刺さっている。

そこから得体の知らない液体が俺の体に注入される。

「うあああああ　嗚呼あああああああ　あああああ
ああああ　あああつ　あああああ　あつ　あああ　あつ　あああ
ああああ　！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! ! !

もうわけが分からなくなる。涙は止まらない。

ここから出たい。

出して。

ここから出してください。

能力（前書き）

グロテスクな表現があります。

人によって、こんなのグロかねえーよお！って思う方もいると思います。

とりあえず、流血表現があるのでご注意を。

能力

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・うぐっ。」

注入されたのが終わった。

まだ器具の上に固定いされたままだ。

「駄目だな。この髪の毛の白いということが失敗ということをあらわしている。」

「ふ・・・う・・・」

大人の男達は0の検査結果を眺めながら話をしている。

「もう、使い物にはならなさそうだな。」

「そうだな。いらないから、殺せ」

耳を疑った。

俺は過酷な状態の中で生き抜いているのに、

簡単に殺すといわれた。

器具が徐々に外れていく。

「今回も駄目だったな。これで何人目だ？」

「さあな。」

俺の実験は何をしているのかも俺自身はよく分からなかった。

失敗は何が失敗なのかが分からない。

0は器具の上でゆっくりと左の鏡を見た。

鏡は欠けていたりしていて、自分の顔がゆがんで見えた。

いつの間にか白くなってしまった髪の毛。

最初は茶髪をしていたのに。

でも、今ではどうだっていいことだ。

「これから死ぬんだから。」

「はずし終わったぞ。」

「こいつらだけでも殺せば・・・」

「んじゃ、死んでもらおうか。」

「俺は・・・」

徐々に死の足音が近づき、大人の手にはナイフが。
そのナイフは躊躇なく振りかざされた。

そして、数秒後には自分の心臓へと突き刺さる。

―ちくしょお。

思いつき振りかざされたナイフが俺の心臓を刺そうとして、俺の
体にナイフの先端が触れた瞬間。

ナイフが吹き飛んだ。

「な、何だ!？」

俺も状況は把握できなかった。

一瞬でナイフは飛ばされた。

飛ばされたナイフは刃の部分がふにやふにやに折れ曲がっている。

「ま、まさか!？嘘だろ……」

「こいつの体は触れたものを撥ね返す能力を持ったなんて……
。」

「われわれの考えていた結果とは真逆だが、これは使える!！」

―俺の体は……ふれたものを撥ね返せる?

大人は0を殺すことやめにし、これからのことに備えて生かすこと
にしたのだ。

―いらねえって言った後には必要?

0は器具の上から起き上がった。

「まだ余力はあるようだな。」

「制御はまだできないのでどうするのですか?」

0はその場で周りをゆっくりと見回した。

まるで、生まれたての生き物のように。

静かに見回すと、器具の上から飛び降りた。

「さあ、次はこの能力をどぐあああああああつあああ!!

!!!!!!!!!!」

男の背中から一気に血が噴出した。

ただ0は彼の背中に触れただけだった。

しかし、0は彼の背中に触れることにより彼の背骨を捻じ曲げたの

だ。

背骨を捻じ曲げたことによって、彼の背骨は肉を突き破り骨が突き出た。

「うわわあああああああわわわわわわああわわ!!!」

悲鳴が、薄暗い嚴重な部屋の中に響き渡る。

0は静かに突き出た背骨を触った。

すると、一瞬にして骨は碎け散った。

0は振り返り落ちたナイフを拾い上げ、そのふにゃふにゃに折り曲がった刃を元通りに直した。

「わ、悪かった!!!!!!」

「ゆ、許してくれええ!!!!!!」

ここの部屋は嚴重すぎて扉を開けるのに時間がかかる。

簡単に抜け出せられないようにだ。

「早くあけるよお!!!!!!何やってんだよ!!!!」

「だって!!!!」

——醜い。自分が殺されると思ったら一刻も自分の身を優先しやがって。

もちろん扉を開けることに協力しない奴らは0を殺すことに専念していた。

「撃て!!!何だっていい!!!殺せるものでさっさと殺せ!!!」

0の体は銃がきかない。撃たれたとしても弾が撥ね返せてしまう。何を投げつけられようと。

「お前らは……全員殺す。」

つぶやくような声で0はぼそりと言った。

0の手のひらが目の前に突き出された。

飛んでくるものはすべてその手のひらに弾き飛ばされていく。

「ば、化け物だあ!!!!!!」

「その化け物を作ったのはためーらじゃねえかあ!!!!!!」

0は地面を強く蹴った。床を撥ね返すかたちとして跳んだ。

「うわあああああああああ……！！！！！！！！！！」

「ぎやあああああ
あああああ
あああああ
あああああ
あああああ
あああああ
あああああ
あああああ
あああああ

ブシュウアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！

首はプツンと言ったかのように胴体と離れた。

「あああああああああああああああああああああああつあ

小柄の弱弱しい男が叫んだ。

「ひいひい！！！」

「次は、お前だな。」

華奢な腕には真つ赤に染まったナイフ。

「あ、あいたあ！！開いたぞお！！」

3人の男が小さな入り口でもめあっていた。

0はその光景を見つめ、すぐに目を伏せた。

すると、その触れた壁からドアのほうまで一気にぐしゃぐしゃに崩

「わわあああ
あああ
あああ
あつあ
あ！！！！！！！！！！！

4人の男の悲鳴が室内に響き渡った。

能力（後書き）

恋愛とか言うジャンルに入ってるくせに。。。。。
全然恋愛じゃねえー！！！！

それはこのうちに伏せておいといてくださいよ。
そのうち出てきます。たぶんw

ああ！

一つ謝っておきたいことが。。。。

『過去』で「俺」が「僕」や「僕ら」になってました。
すいません（汗

俺って読んでください。

細かいことは気にしないで読んでねw↑オイ！

次回もお楽しみにしてくださいと嬉しいです。

確保（前書き）

前回の続きですよW
↑当たり前だ

確保

彼らはただ0を見て震えていた。

出口は瓦礫のクズで塞がってしまった。

次は誰があの人たちのようになるのか。

「大人なんて……サイテーだ。」

0はその男達に言った。

―自分のしたことを理解しろ。

自分の受けた数々の傷を、0はその男達にかえした。

結局男達がしたことは、死という代償でかえってきたのだった。

ぐしゃ

何かがつぶれた音がした。

その後。

俺はその場でただ立ち続けていた。

薄暗く、血の臭いが漂う部屋に。

血の臭いは鼻の奥までつんと来る。

でも、結局俺はこいつらを殺したから何かができるわけでもない。

出来る事というよりも、俺らはこいつらから解放され、今までの苦痛や痛みを味わわ無くていいと言う事だけは言える。

結局俺は、このままのたれ死んでいくのだろう。

真っ赤に染まった俺が中にいるこの空間。

いや、箱。

汚くて気持ちが悪くなる。

でも、清々しい。

—こんなこと思っちゃいけないんだろうけど。

何かが近づいてくる気配がした。

正直薄暗くてよく見えない。

でも足音で分かる。

何かが近づいてくる、ということが。

徐々に近づいてくる足音と共に話し声も聞こえる。

—誰？

0の心の中には何もなかった。

ただ彼らが自分の敵なのか。それとも—。

ただ何者のなのかが知りたかった。

瓦礫が徐々にどかされていった。

「オイ！！見ろ……。」

光が箱の中身を照らした。

懐中電灯を持ったスーツ姿の男が何人が居た。

そして、この参上を見て吐いているのがいるようだった。

それは当たり前といえば当たり前だ。

「ああ！！子供が中にいるぞ！！身柄を確保しろ！！」

一人の男が俺を抱きかかえた。

俺はそいつらを消そうと思えば消せたんだ。

でも『生きる』ということに執着心があるようで、そいつらを拒めなかった。

いや—。この地獄から抜け出せるなら拒むことなんて出来ない。

—やっと抜け出せた。

俺は抱きかかえられたまま、寝てしまったんだ。

確保（後書き）

今回の題名は「確保」と書きました。

本当は「身柄」とかでもよかつたんですよね。。。。

でも「身柄」という題名は次回の重要なキーワードなので、次回の題名にすることになっておりますw

次回も暇があれば見てください^^

起床

目が覚めると目の前には白い天井。

窓の外からは太陽の光があふれ出ている。

そしてカーテンがそよ風になびいていた。

ついこないだまで見ていた景色とはまったく違う。

その景色に俺は呆然としていた。

―ここ……どこだ……？

「目が覚めたか？」

声のするほうを向くと、白い白衣を着た男がいた。

目が赤色をしている。

彼は俺のほうへ近づいて「座ってもいい？」と、ベッドの近くにある椅子を指しながら言った。

「どうぞ。」

素っ気無い返事が白い白衣の男に向けられた。

椅子を引く音が白い部屋に響く。

「キミにはいくつか質問をさせて欲しいんだ。」

椅子に腰掛けながら男は言った。

0はただ窓の外見続けて答えた。

「何？」

「キミの名前はあるのかい？」

「無い。」

0の即答に少し驚いた顔を男は見せた。

「そっか。じゃあ、キミは何をされていたりとか何をさせられたりとかが言えるかい？」

きつとこの質問には、他のみんなはきつと言えなかった。

いや。その前に質問もできない状態でもあっただろう。

「……言えるよ。」

「なら、そのことを教えて欲しいんだ。君は何をされていたか。そ

れか何をさせられてたでもいい。何でもいいんだ。とにかく覚えて
ることは分かる限り、教えて欲しい。」

男は少し気を引き締めたようだった。

声のトーンが違う。

「俺は、じゃない。俺らは実験生物とされていたんだ。」

男の顔が一気に真顔になった。

「あの場所では何が起きていたんだ？他にはもっとひどいことでも
されていたのか？」

Oは顔色一つ変えずに淡々と答えている。

「俺はあの実験生物と提供されたのは8つの頃。そこであいつらと
はあった。」

淡々と答える少年の姿に、男は驚きを隠せていなかった。

「すまないが、なぜあの場所に行くことになったかを教えて欲しい。」

「

男はすまなそうな顔をしながら聞いた。

「構わない。俺は幼い頃、物心が付き始めたときに親を殺された。

普通の家の中、みんなは血を流してた。」

「その殺した人の顔を覚えてるか？」

男はすかさず質問をしてきた。

「よく分からなかった。けど、みんなの倒れてるところには血が溢
れかえるほどあった。怖くて、気持ち悪くて逃げ出したら……」

。大人に捕まった。」

「それで気づいたらあの場所に居たのか？」

「そう。そしたらいきなり掴まれて頑丈なこうそく器具の上に寝さ
せられてよく分からない液体を太いチューブで体に流し込まれた。」

そのあと、俺は今まであった実験のこと・受けた傷など、覚えてい
ることはすべて伝えた。

男は何も言わずにただ頷いていた。

「俺が言えるのはこれだけだよ。」

言い終わるとまた窓のほうへOは向いた。

「そうか。ありがと。傷口をえぐるようなことをしてすまなかった。」

「べつにいいよ。」

男は俺に優しいまなざしを向けながら言った。

「何か俺に質問することは無いか？」

「じゃあ、聞かせて。ここはどこ？そしてあんたは何者？」

素っ気無く言うことに男はあきらめのため息をついた。

「そうだね。こちらのことは何も言っていなかったからね。俺の名前は雅信。歳は27。おれの正体はお前の味方だよ。大丈夫。ここに居る限り、お前はあのような惨劇を見もしないし繰り返もしない。」

男はそう言って0の頭を軽くなでた。

0は相変わらずのぶつきらぼう面だった。

男はその表情にあきれたようにくすりと笑った。

「ねえ。ここはどこなの？その質問を答えて。」

「はいはい。……ここは一般病棟は違う病棟だよ。キミはあの惨すぎる状況を見てしまったんだ。だから精神状態を落ち着かせなきゃならないんだ。ある程度落ち着いたらなら、引き取ってもらう親を探すか孤児院に行ってもらうようになってる。基本、孤児院の子がほとんどだろうね。」

少しつらそうな顔をしながら彼は言っている。

「そうか。」

「キミはもう、ある程度落ち着いているから孤児院に言ってもらうことになって居るよ。里親が見つからなくてね。」

こんな奇妙な髪の色をした奴を引き取るうなんて普通は思わない。当たり前といえば当たり前だった。

「それじゃ、こちら辺で失礼させてもらうよ。」

重たそうな腰を上げて静かにその場を去っていった。

――俺はこれからどうなるのだろう。

不安が真つ先に0の胸をよぎった。
空はまるで0の心を映したように曇り空へとかわっていった。

起床（後書き）

正直言いますと、雅信はそんなにこれからの話には関係ないと思いますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7048j/>

人を好きになってはいけない

2011年1月27日06時54分発行